

## 本音で語り合う意義

昨日県北ので開かれた障害児の 地区支援懇談会で講話の機会を得た。親、教師、行政、関係者、等々、50～60名が参加していた。私以外に県職員の支援費制度の説明、地域コ・デイネ・タ・の任務の説明があった。

私はこれといって説明するものは持ち合わせていない。親と係わってきた長年からの経験から、親、関係者等にそれぞれにまたまた煙たがられるであろうことを話した。懇談の時間でも同様なことに触れた。

懇談の中で、地区の知的障害児・者の親の会・会長が「阿部さんのおっしゃる通り。親たちもこれからも頑張ろう！」との発言をいただいた。また、会終了後、幾人かの母親から「名刺をいただきたい」と声をかけていただいた。

福祉、しかも親達を交えたこうした会は、本音で語り合うことが大事と思う。親達は長年苦勞し、行政の冷たい対応、関係者の無理解、等々、十二分過ぎるぐらい体験してきているのである。いまさら上辺だけの話をして、通じるものでない。また親はそうした体験から、しばしば諦めに似た感情もあり、真に我が子への取り組みに消極的に成りがちである。そこで私は、お互いに本音で語り合えるように、時に親にも関係者にも煙たがられるであろうことを話題にして触れる。特に親には、行政担当者とは喧嘩するな！行政担当者を理解者、協力者にするように教育する努力をしろ！とあえて云う。

人間（障害児、老人を含め）相手のことには、ゴールはない。お互いがお互いの立場で共通の問題である、その対象者の支援を、その時点で具体的にどう考え、どう取り組むかというしかないと思っている。それだけに、本音で語り合うしか、互いのなすべきことは見えてこないと思っている。

まあ、こうした意味では、会長の発言、名刺のこと等から、昨日の会も私の願いは何とか伝わったようである

（2002年11月28日記）